

令和7年度 とりこぼさない支援を考えるプラットフォーム

活動の足あと4

ようこそ!とりこぼプラットフォームへ

とりこぼさない支援を考えるプラットフォーム(とりこぼ PF)は、

皆さんが「とりこぼ PF」を「作り」「育てる」というスタンスが大事です。



「継続」と「充実」の肝は関わる皆さんの熱量です。

活動者・ボランティア・専門職が主体的に参加する「場」



参加者は「お客様」ではありません。また参加を強制されることなく、出入りが自由です。

「つながり」を大切に人・考え・活動に出会える「場」



支援のノウハウ、新しい活動、可能性、アイデアなどたくさんの出会いを感じましょう。

あなたの「思い」は否定されません。他の人の考えに触れ、自由に発言しましょう



あなたの「思い」は大事な1つです。皆さんの「思い」が重なり合うことが大事です。

はじめに

長岡京市は令和5年度から、重層的支援体制整備事業を実施しています。それと同時に制度・サービスでは対応できない「はざま」といわれる課題に対して、専門職だけでなく、地域の住民や活動者と手を取りあいながら、支援について考えることができる「土壌」をつくるためのプラットフォームの構築に取り組んできました。

このプラットフォームが、今後も継続的・主体的に行われ、参画する人の手で育てられることで、「はざま」の課題に直面する人への支援がより良いものになることを願い、この1年間の取り組みをここにまとめました。参加した事がある人も、これから参加を考えている人も、本書に目を通していただき、「つながり」や「協働」を一緒に考えていけるようなればとても嬉しく思います。

とりこぼさない支援を考えるプラットフォーム
コアメンバー一同

令和7年度 『とりこぼプラットフォーム』の実施状況

R7第1回コアメンバー会議	R7第2回コアメンバー会議	R7第3回コアメンバー会議
日時 令和7年4月24日(木)	日時 令和7年8月5日(火)	日時 令和7年12月17日(水)
トピックス ▶とりこぼされている支援について ▶参加型の交流会のプログラムについて ▶協働をすすめるための意見交換について ▶令和7年度の目標設定	トピックス ▶多世代の人が活躍できる居場所について ▶とりこぼされている支援について ▶協働をすすめるための意見交換について	トピックス ▶「はざま」の問題を解決する方法とは ▶多様な参加がある交流会の重要性とは ▶希望する講演内容について協議
第8回とりこぼさない支援をうみだす交流会 参加：93名(うち初参加 25名)	第9回とりこぼさない支援をうみだす交流会 参加：86名(うち初参加 26名)	第10回とりこぼさない支援をうみだす交流会 参加：84名(うち初参加 15名)
日時 令和7年6月2日(月) パンピオ3階メインホール	日時 令和7年10月9日(木) パンピオ3階メインホール	日時 令和8年1月28日(水) パンピオ3階メインホール
プログラム ・活動マッピング ・R6年度のふりかえり「活動の足あと3」 ・報告セッション 「ばらでい京都」/「み〜っけ!長岡京」 ・つながるワーク(とりこぼワールドカフェ) ・全員参加のフリータイム	プログラム ・活動マッピングカスタマイズ ・報告セッション「チエコズモールハウス」 ・テーマ別グループワーク ・こどもの居場所を通した多世代交流について(むすびえ) ・全員参加のフリータイム	プログラム ・活動マッピングカスタマイズ ・認定NPO法人 全国こども食堂支援センター むすびえ 湯浅誠氏 特別講演 ・コアメンバーと参加者による寸劇 ・グループワーク ・全員参加のフリータイム



■包括的支援体制の整備にむけて

このプラットフォーム（以下PF）の交流会は、福祉支援者や市民活動者、企業などがつながる「場」であり、最初の出会いの一押しをする下支えの「場」です。それと同時に、長岡京市が推進する『とりこぼさない（重層的）支援体制』の取り組み内容や状況の共有と、参加者同士の意見交換や活動のノウハウの共有を促進することで、包括的支援体制を充実させていくことを目的として運営しています。

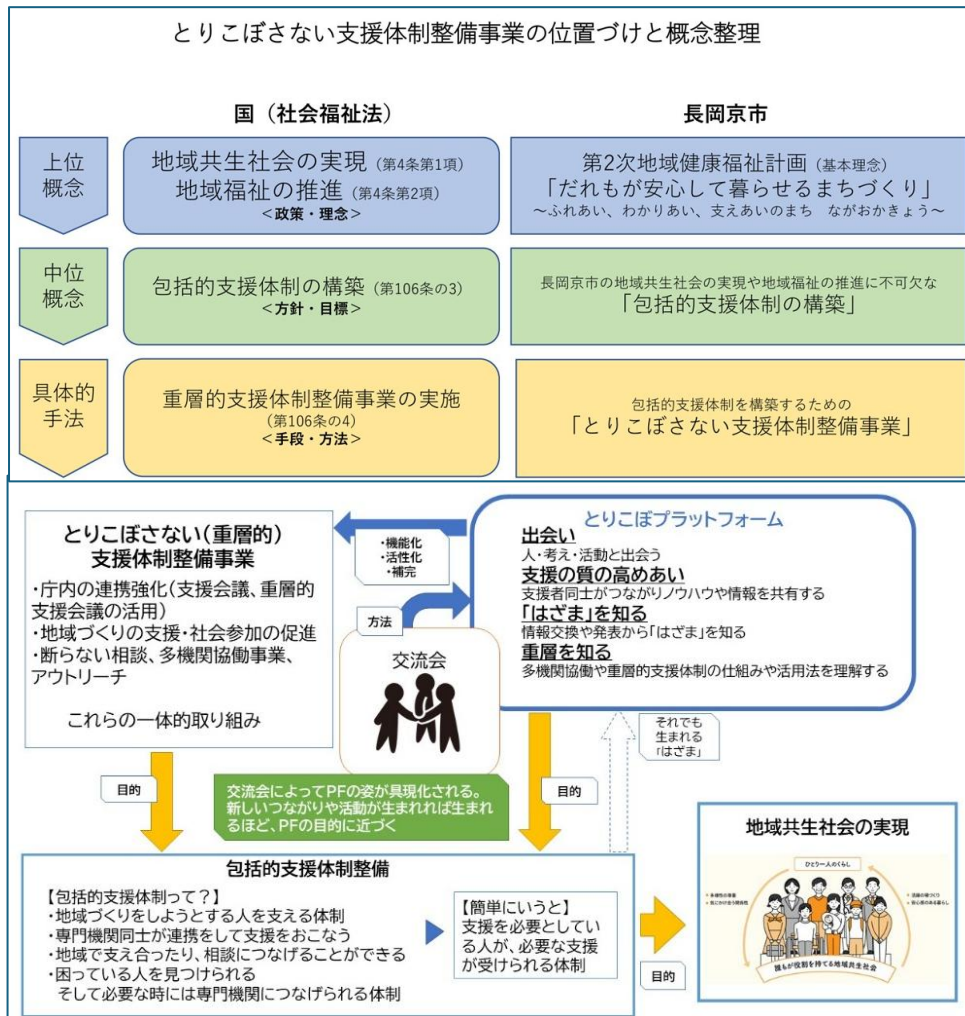
◀これまでの取り組みの詳細は「活動の足あと1・2・3」に記載、背表紙のQR参照▶

今年度は、3回実施した交流会においていずれも80名を超える参加がありました。この交流会の特徴として、常に初参加の人が一定数以上あることが挙げられます。毎回必ず参加する人、定期的に参加する人

など、多様な参加者層がいつもこの「場」にはあります。既に参加されている人が新しい参加を促し、「新しいつながり」や「気づき」を増やしていく。そんな「場」に参加するみなさんと一緒に育てていくことができます。

包括的支援体制は、支援を必要としている人が、必要な機関や人とつながり、必要な支援を受けることができることを目指すものです。

必要な支援は、制度やサービス以外に、地域の支え合いのなかで行われるものや、地域にある活動や団体が主体的に行うものなど、さまざまです。それらを合わせて連携し、とりこぼされる人がないように、地域の実情にあった支え合う体制を整えていくことが、『とりこぼさない（重層的）支援体制整備』と『とり



こぼPF』の共通した目的です。（上図参照）

だから私たちコアメンバーは、この交流会を通して、「出会い」「支援の質の高めあい」「はざまを知る」「とりこぼさない（重層的）支援体制をどう活用するかを知る」を具現化し、長岡京市の支え合いの土壌を豊かにしていき、参加されるみなさんと一緒にPFをこれからも育てていきたいと考えています。

■コアメンバーおよびアドバイザー講師

乙訓もも	NPO 法人乙訓障害者事業協会	藤田 晃久 脇田 俊一郎
ステージ	NPO 法人こらぼねっと京都	小松 哲也
あっとホーム	NPO 法人てくてく	柴山 岳博
やよい工房	NPO 法人乙訓やよい福祉会	井上 譲
きずなグループ	(福) 長岡京市社会福祉協議会	西野 寛子
ゆあさ社労士事務所	企業	湯浅 卓磨
フェリーチェ	市民活動	篠田 優美

虹色でんしゃ	市民活動	野田 めぐみ
十色	フリースクール	野田 宣之
ぱらでい京都	居場所づくり	西脇 千江美 秋田 範子 丸橋 明美
木和治療院	企業	木和 躍典
つむぎ	企業	河村 優子
くらし連携担当	長岡京市地域福祉連携室	林田 文晴
アドバイザー講師	(一社)Wellbe Design	篠原 辰二

■令和7年度 第1回～第3回コアメンバー会議

令和6年度のとりこぼしPFのアウトカムを測定した結果、交流会への継続的な参加が活動のコラボレーションや新しい活動をうみだすことにつながりやすいことがわかりました。この結果を踏まえて、どうすれば多くの人に、継続的に交流会に参加してもらえるか。そして、新しい活動をうみだしていくための機運醸成ができるかを考え、5つのベンチマークを設定しました。

■令和7年度の目標設定(5つのベンチマーク)と取り組み

【ベンチマーク】と《説明(コアメンバー会議での議論)》および、《取り組み》

【1】プレ交流会から検討を続けてきたPFの在り方について振り返ること。

《説明》令和4年度プレ交流会での参加者の声は、「居場所」の必要性、「はざま」を知ることの重要性でした。また、PFが在ることによって、「居場所」を作りたいという声の実現化や、「出会い」「つながり」を体感できる場となるかもしれないという期待感がありました。

参加者にとって、「出会い」や協働のきっかけとなる「場」であることの実感や、「居場所」などの活動の実現や「はざま」に関連する議論の機会をPFが支えているかということをおぼろげに測ることとして交流会に臨みました。

《取り組み》第9回の交流会にて、PF参加者における協働についての意識・意見の交換や議論を重ねてまとめる。

【2】「参加型」の交流会にしていくための企画を実行すること。

《説明》持続可能なPFをつくっていくためには、プログラムを提供するだけでなく、参加者とともにこのPFを育てていくという意識を改めて共有するための取り組みが必要だと考え、これまでよりさらに参画型のプログラムを実行することとしました。

《取り組み》交流会で実施するグループワークなどにおいて、ファシリテーターを参加者から募ることや、寸劇における事例や展開を参加者とともに考える企画を実行。

【3】ひきこもりや8050問題以外の「はざま」の課題や「多様性」などに関するテーマや事例を取り扱うこと。

《説明》交流会で取り扱う事例がひきこもり、8050問題に偏っている現状があるため、これまでのベーシックな交流会を継続しながらも、取り上げていなかったテーマや事例を取り扱うことに挑戦してみる。グループワークまたは、寸劇で取り上げるのかなど、その方法もコアメンバーで検討し具体化をめざすこととしました。

《取り組み》LGBTQ支援の専門機関など新しい参加者を交流会に招き、意見交換の場で参加者同士が新しい気づきや情報に触れることが可能な設定を試みる。また寸劇においても多様性に関する要素を取り入れる。

【4】「はざま」≡「とりこぼされている支援」の現状について参加者と共有し、「とりこぼさない支援体制」や「とりこぼPF」の意義の理解を促進する。

《説明》とりこぼさない支援体制は支援者側からの目線でのネーミングであるが、「支援が必要な人とつながることが難しいケース」の場合に、『支援者がいかに本人の意思決定を支え「とりこぼさない支援」につなげることができるか』を考えるうえで、このPFはどういう役割を担えるのかについて、参加者同士の意見交換を活発にしたい。

《取り組み》「とりこぼされている支援はどこだ!」をテーマに参加者が普段から感じていることや、どうすればとりこぼさない支援体制に近づくことができるのかを意見交換する機会を設ける。

【5】令和4年度からの取り組みにおける成果として、PFをきっかけにうみだされた活動または、PFに関連した活動は継続されているかを確認する。

《説明》これまでのPFのスタンスは、自由な市民活動への「監視」の要素が強くなる懸念があることから、交流会をきっかけに始まった協働や新しい活動などをすべて捕捉することには積極的ではありませんでした。とはいえ、これまでの活動を確認できる範囲で共有した方が、参加者にとっても勇気づけられるのではないという意見から、共有に取り組むこととしました。

《取り組み》これまでの活動の起こりや、参加者同士のコラボレーションなどを報告書にまとめる。

コアメンバーは、テーマやプログラムに上記のベンチマークの要素を入れるよう意識しながら、交流会の開催に臨むこととしました。

【アドバイザー シノさんの ちょこっとコラム】

とりこぼし交流会は企画・運営を担うコアメンバーの意図的な地域づくり実践でもあります。どのような人たちと出会い、何をテーマにして語り合うのかを考え、互いに知りあうための工夫や継続した参加を生み出すための雰囲気をつくり上げています。毎回参加者の1～2割は初参加の皆さまでもあり、多様化する参加者にあわせコアメンバーも多様化し、より良い場づくりを築いています。これから交流会に参加される方はぜひ、コアメンバーの主体的な参画の様子と熱い思いを感じてください！交流会も10回を数えましたが、新しいつながりを自身の活動に生かしたり、交流会からスピノフした更なる交流の場が芽生えたりするような副産物をぜひ増やしてほしいと願っています。

次年度の交流会では副産物が生まれた報告をお伺いできることを期待しています。

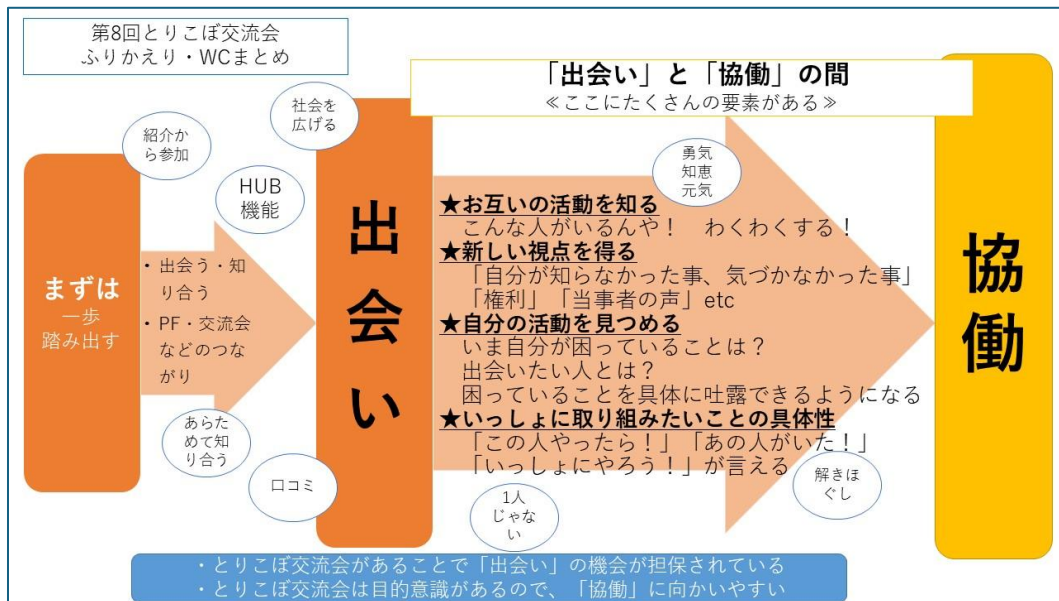


Wellbe Design 篠原 辰二

■第8回とりこぼさない支援をうみだす交流会(参加:93名 見学:9名)

今年度最初の交流会となる第8回では、ワールドカフェのテーマを「協働」として、PFが「出会い」や「つながり」、そして「協働」を促進する場として育っていくためには何が重要になるのかを意見交換しました。初参加の人から全参加の人まで、PFにかかわってきた度合いの濃淡はあれども、共通のキーワードが何かを探することでPF活性のヒントを見出す試みを行いました。

全員参加のワールドカフェのなかで、「交流会ではすでに出会いが担保されている」また「目的意識がはっきりしているので協働に向かいやすい」との意見を多くいただきました。そのうえで、自分たちの活動を見つめなおし、取り組みたいことの具体性を発信できるまでの行動化にPF



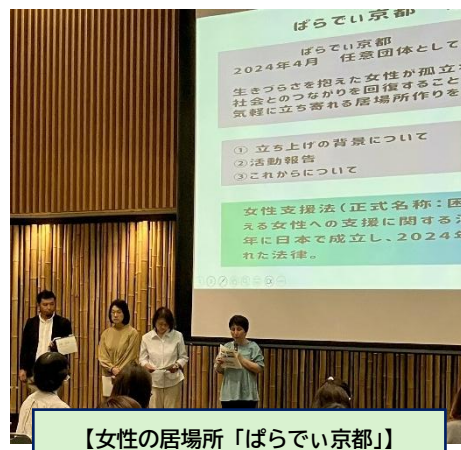
が寄与していることがわかりました。これは、令和4年度のプレ交流会にて声としてあがっていた、PFに対する「つながりの場」となってほしいという期待が、自身の活動を広げたり、居場所などの活動を取り組みたい人にとっての「後押し」の場」となって実現していることの現れと言えます。【ベンチマーク1】

また、各グループではファシリテーターを参加者から募り、交流・意見交換を一緒にもりあげていく試みも行うことができました。【ベンチマーク2】

【年度初めは「つながるワーク」
とりこぼすワールドカフェ！】



【女性の居場所「ばらでい京都」】



■第9回とりこぼさない支援をうみだす交流会(参加:86名)

第8回～第10回の交流会にかけて、コア会議のなかで目標としていた、「多様性に関するテーマ」に触れる機会や「とりこぼされている支援」について、意見交換する場を設けることに取り組みました。特に第9回ではLGBTQ支援の専門機関など新しい参加者を交流会に招いたり、グループワークのテーマ「とりこぼされている支援はどこだ！」を設定したりすることで、気づきや、新しい情報に触れることを促進しました。【ベンチマーク3】

「はざま」の問題を制度化・法制化だけに頼るのではなく、相談できる場所・人を地域にも専門機関にも増やしていくことの重要性について意見交換がされました。地域やご近所で話せる場所、専門職が相談にのってくれる窓口など、それぞれが連携し、息の長い関わりをもつことが「はざま」の問題を解決する可能性につながるのではないかとといった見解がだされ、とりこぼさない支援体制やPFが目指して

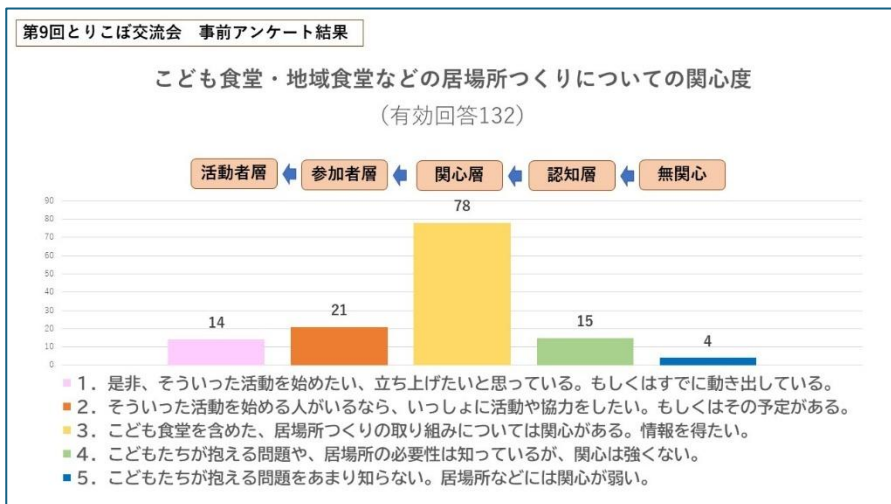
いる包括的支援体制の理念が参加者とも共有できていることがわかりました。【ベンチマーク4】



また第8回、第9回の事前アンケートにおいて、今後交流会にて取り扱いたいテーマについて、参加されているみなさんから2つの意見聴取を行いました。

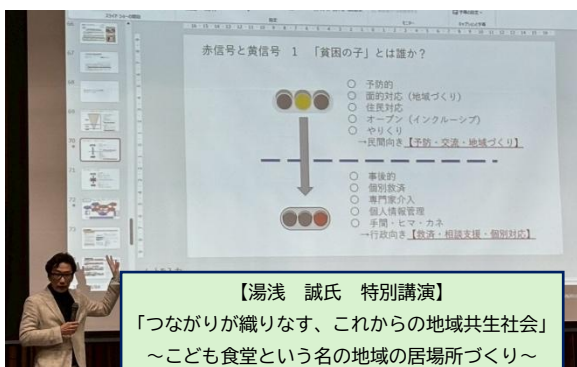
1つめが関心のあるテーマについてです。これは、令和4年度からの意見に呼応するように「地域サロンや子ども食堂など、集まる人すべてが役割をもったり交流できる居場所について」の関心が最も高くなりました。

それを踏まえて、2つめのアンケートとして、子ども食堂・地域食堂などの居場所づくりについての関心度を回答してもらいました。(上図参照)



これらの2つのアンケート結果を踏まえ、多世代が参加・活躍できる居場所に関する情報や、住民活動と行政や専門職との協働の在り方などをあらためて確認し、今後のPFにおける活動の拡がりをもみんな考えていけるように第10回の交流会において、認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえの湯浅誠氏による講演会を実施することとしました。

■第10回とりこぼさない支援をうみだす交流会(参加:84名 見学:5名)



され、居場所への関心が高いとりこぼ交流会参加者への応援メッセージをいただきました。

恒例となったコアメンバーによる寸劇では、ひきこもり世帯の課題だけでなく、外国人との関りのなかで果たせる役割など、これまでには取り扱っていないテーマについてもチャレンジしました。また、グループワークでは、参加者全員が寸劇の展開をもとに、人・物・場所などの資源について「実際にあるもの」から「あったらいいなと思うもの」まで、多様な組み合わせと幅広いストーリーを各グループで考える取り組みが行えました。【ベンチマーク2・3】

第10回の交流会において、湯浅誠氏から住民の課題にはその状況に応じて、行政や専門職が関わるべき時と、住民活動の方が自然に関われる時がある。その両輪が充実していることが「とりこぼされない社会」につながる。地域の中に、だれもが参加できる居場所があるからこそ、課題が深刻化するまえに、住民活動の場で助かる世帯がたくさんある。さらに、そのツールとして子ども食堂や地域食堂のような居場所が有用であることを示



今回も好評の寸劇！



あたらしい活動マッピングも活発になってきました。

■とりこぼPFがあることの効果や成果の共有

私たちコアメンバーは、これまでの交流会において、「参加」を出発点として「気づき」や「出会い」を経て「協働」までの道のりを歩んできた活動や取り組みを、あらためて挙げてみることでこれからの新しい「つながり」や「活動」が促進されることを期待しています。ここでは、PFをきっかけに、あるいはPFに関連して始まった取り組みを挙げます。【ベンチマーク5】

●金融機関×福祉支援×市民

- 金融機関が店舗スペースを開放し、地域包括支援センターと協力して体操教室や生活講座を開催。高齢者が気軽に集える「新しい居場所」が生まれた。
- 窓口で認知症などの困りごとに気づいた際、スムーズに福祉支援へつなぐ体制も整ってきた。お金の相談だけでなく、異変をいち早く察知し支える。専門職と企業の連携が、街のセーフティネットを広げている。



市内金融機関にある福祉の情報スペースや体操教室の様子

●福祉事業者×チャレンジしたい市民

- 「やりたい」想いがつながり、月1回のこども食堂が誕生！「初めての活動で不安」だったが、交流会での発信をきっかけに動き出し「少しなら協力できる」という仲間が集まり、月に一度カレーライスを提供することも食堂が実現。
- 店舗の都合で休止したが、個人の熱意と地域の協力が重なれば、新しい居場所はいつでも作れるという貴重なモデル。

●子育て中の親団体×雇用促進事業団体

- 子育て支援の市民団体のイベントに、職業訓練センターが参加。求職ニーズに対して、託児所併設職業訓練があるなど、情報を得る機会づくりにつながった。（職業訓練体験コーナーや職業相談など）

●フリースクール×フードバンク活動団体

- フリースクールを利用する子どもたちが、フードバンクから届くおやつを囲み、リラックスして過ごせる居場所ができた。
- 団体との交流をきっかけに、子どもたちは環境問題や福祉について学び、自ら啓発活動などの社会貢献に挑戦。食を通じたつながりが、子どもたちの自信と社会参加の形を育んでいる。

●居住支援法人(不動産)×生活困窮者支援

- 京都府居住支援法人に加盟している不動産事業者が地域課題を把握する機会づくりとして、不動産事業者と地域の福祉課題を共に考える場ができた。
- 高齢者や生活に困っている方の「住まい」の悩みを迅速に解決できるようになってきた。
- 居住支援法人と支援機関がタッグを組むことにより、民間の専門知識と福祉のサポートが重なり、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるまちへ前進。

●若年の女性支援団体×学習塾

- ・若年女性を支える「新しい居場所」が、地域のマッチングで誕生。支援の場を探していた市民団体が、社会福祉協議会の仲介により、市内の学習塾の空き時間とスペースを活用することで、安心して過ごせる女性のための拠点が実現。

●高齢者支援者×障がい者支援者

- ・高齢者と障がい者、異なる分野の支援者がつながり、支える力が向上した。同じ世帯を支えながら接点が無かった支援者同士が、交流会を機に対話を開始。
- ・お互いの制度を学び合う合同勉強会が実現。分野を越えた情報共有により、家族全員を丸ごと支える支援が可能になった。

●地域福祉専門職×コアメンバー

- ・全国区の地域福祉専門職を招き、運営の核となる市内NPO等によるコアメンバーへの継続的な助言体制を実施。専門的なノウハウが蓄積され質の高い交流会や有識者講演会の開催を通じて市民や支援者の意識醸成が飛躍的に進んだ。
- ・本市の「とりこぼPF」は、京都府内の各自治体はもとより、遠く北海道恵庭市でも導入されるなど「長岡京市モデル」として注目を集めた。今後もこの知見を活かし、さらなるネットワーク拡充を目指す。



交流会のあとのコアメンバーによる振り返りの様子

長岡京市社会福祉協議会

「み～っけ！長岡京」



●社会福祉協議会×とりこぼPF

- ・交流会で把握した「活動したい市民」のニーズを反映する手立ての一つとして、社協が市内団体を紹介するサイト「み～っけ！長岡京」を紹介。
- ・居場所を探す人と活動主体を繋ぐ具体的ツールで情報の共有からマッチングまでを迅速化させ、市民の「参加」を後押ししている。

●支援学校生徒×とりこぼPF

- ・支援学校の生徒が「支えられる側」ではなく、交流会を支える「担い手」として活躍。就労体験として資料やグループワークの資材作成を担い、当日は生徒たちが作った名札が会場を彩った。
- ・障がいがあっても、得意を活かして社会を豊かにできる。この試みは、参加者全員が「障がい者の活躍」を自分事として捉える大きなきっかけとなった。

●地域お助けサポーター×とりこぼPF

- ・高齢者の「役割」と「生きがい」を創出する地域共生モデル介護予防事業で養成された「地域お助けサポーター」が、習得したコーヒー抽出技術を交流会で実践した。
- ・高齢者が培ったスキルを地域へ還元し、「支え手」として活躍する高齢者の社会参加と生きがい創出が同時に実現することができた。



地域お助けサポーターのんにカフェが交流会に登場

支援学校の生徒作成名札や円形模造紙



その他、教育関係者×福祉支援者×市民活動団体が連携した事例、障がいのある人の家族会の発信、生きづらさを感じている若者の参画などが交流会にて確認されました。

■包括的支援体制をみんなで考えられる場に

とりこぼ交流会は、多くの参画に支えられながら第10回を終えることができました。その中で、とりこぼさない支援体制整備は、「包括的支援体制」や「地域共生社会」に向かうための手段であり、地域の多様な主体とともに長岡京市の福祉のまちづくりと一緒に考えていくことの大切さをあらためて感じています。専門職による支援や、地域での支え合いの活動が、どのように包括的支援につながるのか。長岡京市らしい支え合いの活動や連携とは何か。そんなテーマをみなさんと意見交換できるようなPFに育てていただけるように、継続していきます。

今後も、多くの方の主体的な参加をお待ちしております。

背景紙に参加者それぞれが思う、「私にとってのとりこぼPF」を掲載しています。是非、ご覧ください →→→



令和7年度
とりほさない支援を考えるプラットフォーム

活動の足あと4

作成

とりほさない支援を考えるプラットフォームコアメンバー

長岡京市地域福祉連携室

